短期大学の学生調査

―キャリア教育・職業教育の探究１―

A Survey of Current Students' Views on the Quality of Education at Junior College

安部　恵美子、小嶋　栄子

1. 研究の課題と方法

18 歳人口の減少と高等教育ユニバーサル化が生み出した入学者の質的な変化と多様化の中で、短期大学教育には、建学の精神や教育の理念に基づいた「個性化・特色化」と、学位保証という観点からの「標準化」が求められている。しかしながら、短大教育の特徴や成果を検証するために、教育の受益者である学生の、教育に対する評価や在学中のキャリア意識の成長を客観的に測定する方法や、在学中の成果と教育課程の関連性を明らかにした研究は、これまでほとんど見られなかった。本研究は、平成 21 年 4 月の短期大学入学生を対象に実施した「短大在学生調査」の分析結果を素に、短大生の学習や生活に関する意識や実態をとらえ、学びの実態を規定する要因（入学前の学習経験・短大の学習モードなど）や、学習成果形成プロセスの具体を明らかにすることを目的とする。

2. 調査の方法

1) 調査の実施：平成 21 年 9 月～ 11 月　調査対象短大毎に「質問紙調査」の一斉実施・回収
2) 調査の対象：全国 48 短大
（北海道 3　東北 3　関東 6　東京 3　中部　9　近畿 6　大阪 2　中四国 1 九州沖縄 17）の
平成 21 年度入学生　7,859 人（女性 7,465 人　男性 374 人）（注 1 ）

表 1　専攻分野別の割合

	人文	社会	教養	工業	農業	保健	家政	教育	芸術	地域総合科学科	不明
N	776	366	99	112	99	320	1947	2778	139	1213	10
%	9.9%	4.7%	1.3%	1.4%	1.3%	4.1%	24.8%	35.3%	1.8%	15.4%	0.1%

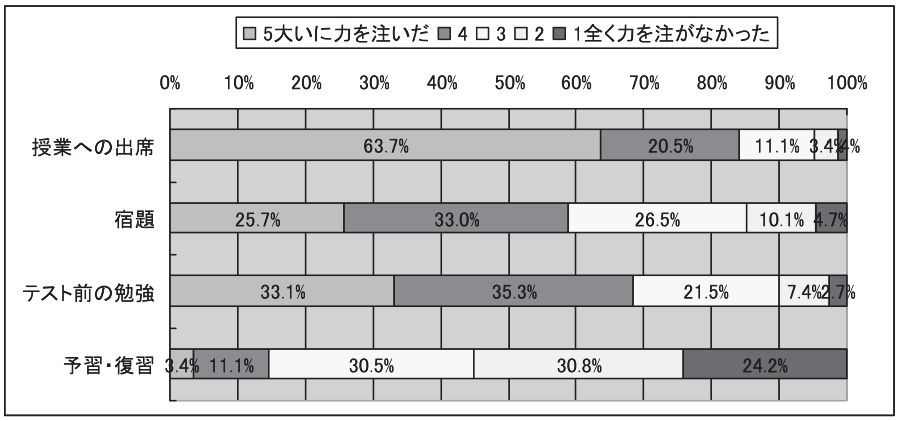
※本研究での分野別分析は「人文・教養」「家政」「教育」「地域総合科学科」「社会」「保健」を対象とする

3. 入学前の学習や生活

卒業した高校は、普通科が 7 割（69.1%）を占め、また、全日制出身者が 97.3%、年齢は 18-19 歳が 95.5%と、高卒直後に短大へ進学した者がほとんどであった。

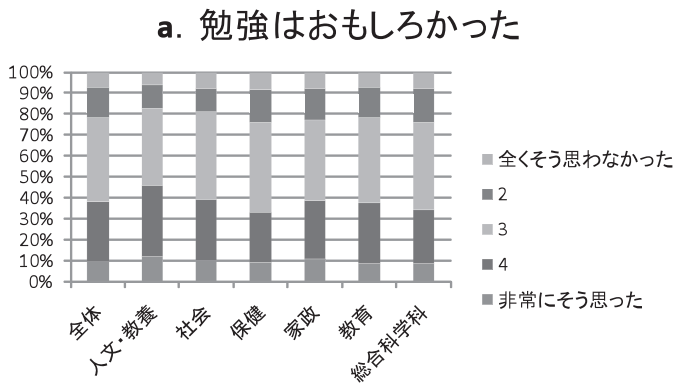
高校時代は、授業に出席して試験前には一生懸命勉強するが、予習復習の習慣が確立している者は 15%で、1 週間の総勉強時間は、2 時間に満たない者が半数を超える（57.2%）。専攻分野別では、人文･教養分野の学生は､他の分野に比較して予習復習の習慣が身についている者が多かった（22.3%）が、地域総合科学学科では、6 割を超える者が予習復習に熱心に取り組んでいない。

図１　高校での学習経験

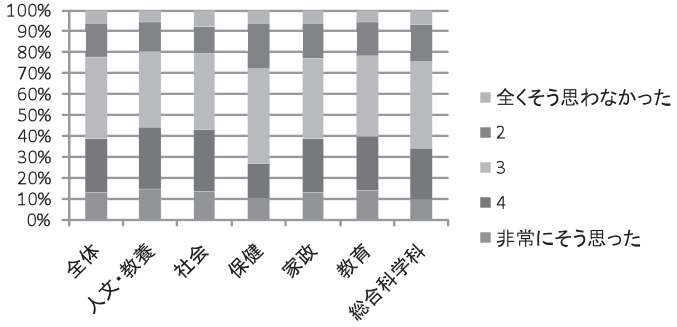


さらに、高校での勉強を「面白くない（図２a)」「将来役に立たない（図２b)」「何のために勉強するのかわからない（図２c)」と感じていた者がそれぞれ、21.8%、22.4%、18.1%で、入学者の２割は、高校の学習に対して否定的な見解を持っているが、その傾向は、地域総合科学科で強い（23.7%、24.3%、23.1%）。逆に、３分の１が高校での学習を肯定的に捉えている。４割の“どちらでもない”を挟んで、短大進学者の学習に対する意識の多様化がみられる。

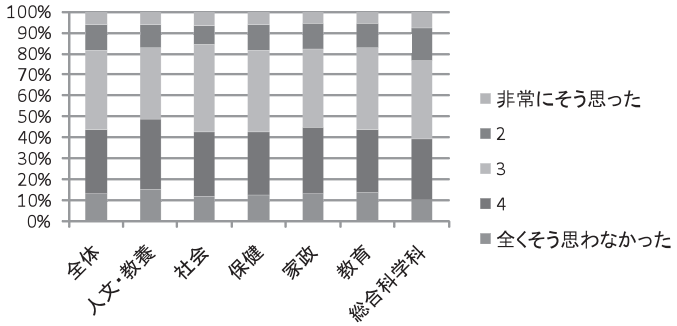
図２　短大での学びを規定する要因としての高校の学習内容に対する評価



b. 将来役に立つと思った



c. 何のための勉強かわからなかった



授業以外の活動に関して、全体では「友達との交際」や「趣味」に特に力を注ぎ、また、「サークル・クラブ・部活動」にも６割近くが熱心に参加していた。また、３分の１の学生が「アルバイト」に熱心に取り組んでいたが、「ボランティア活動」には２割の学生しか取り組んでいない。「実習やインターンシップ等、職場での就業体験」と「ボランティア活動」は、教育分野が、より経験しており、また、「アルバイト」は、地域総合科学科生の経験率が高い。

4. 入学前の期待と志望動機

入学前は、高校とは違う「自由な雰囲気（5段階評価の期待度が4.1　以下同じ）」の中で「興味のある分野の勉強（4.2）」や「将来の職業に役立つ勉強（4.3）」をすることや、「新しい友達との出会い（4.3）」を強く期待していた。また、「サークル・クラブ・部活動での活躍（3.0）」「ボランティア活動（2.7）」よりも、「趣味活動（3.7）」「アルバイト（3.6）」といった、学外での活動に対する期待度が高かった。

表２　短大生活への期待（５段階評価）

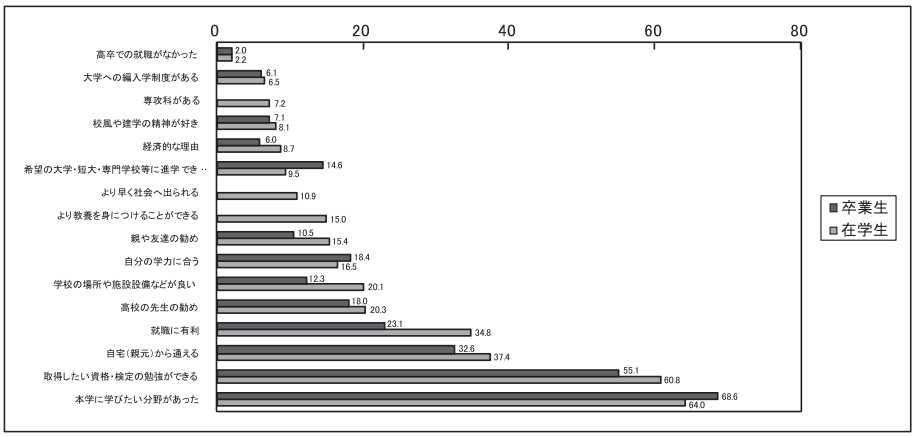
	全体	人文・教養	社会	保健	家政	教育	地域総合
a. 興味ある分野勉強	4.2	4.2	4	3.9	4.1	4.3	4.2
b. 職業に役立つ勉強	4.3	4.2	4.2	4.3	4.2	4.4	4.3
c. 教養を深めること	3.8	4	3.7	3.9	3.7	3.9	3.8
d. 良い先生	3.5	3.6	3.4	3.6	3.4	3.6	3.3
e. 新しい友達	4.3	4.2	4.2	4.3	4.2	4.4	4.2
f. 自由な雰囲気	4.1	4.2	4.1	4	4.1	4.1	4.2
g. ボランティア活動	2.7	2.7	2.8	2.6	2.5	3	2.4
h. サークル・部活動	3	3.2	3	2.9	2.9	3.1	2.9
i. アルバイト	3.6	3.7	3.6	3.5	3.5	3.6	3.7
j. 趣味等の活動	3.7	4	3.7	3.6	3.7	3.7	3.7
k. 一人暮らし	2.2	2.3	2.1	2.1	2.2	2.2	2.2

１年前に、現在在学中の短大が第一志望だった者は約半数で、他の短大を含めて、短大を進学先に決めていたのは６割弱である。その割合は専攻分野間で異なり、教育（67.0%）、保健（64.8%）で高く、人文（45.6%）で低かった。短大への進学理由は「学びたい分野があった（64.0%）」「資格・検定取得のため（60.8%）」が多いが、「自宅から通える（37.4%）」「就職に有利（34.8%）」も３割を超えている。

短大卒業生調査（注２）と比較すると、在学生の方が「就職に有利」が11.7%、「学校の場所や施設設備などが良い」という理由が7.8%多い。これは短期大学で近年、職業教育や就職支援、また、施設設備面での充実が図られたことを示唆している。また、親や友だち、高校の教師に勧められて進学したという理由も在学生の方が多い。逆に「希望の学校に進学できなかったから」「自分の学力に合っていたから」という理由は卒業生の方が多い。在学生の85%は、推薦・ＡＯ入試などで入学している。そのため不本意入学者は減少し、同時に、短大に学力で入学するという意識も低下している。自分の興味関心に合致し将来の職業に役立つかどうかが進学先決定のポイントであり、身近な人々からの意見も参考にして進学していることが分かる。さらに「自宅から通える」と「経済的理由」が卒業生より在学生の割合が高いことは、短大生の進学理由に、家庭の経済状況の影響が強まっていることを示している（図３）。

専攻分野別の進学理由を見ると、教育（72.8%）で「資格・検定取得のため」が高く、「編入制度があったから」は、人文・教養（16.3%）で高かった。また、地域総合科学科は「早く社会に出られる」「より教養を身につけられる」「学力に合っていた」以外の理由の選択率は、すべて全体よりも低い。

図３　短大進学理由（卒業生との比較）



予習・復習の習慣がある者が７人に１人であるなど、短大入学前の学習経験が十分ではない学生が８割も存在するという事実は、入学後の学びに困難が生じることを示唆している。

しかし、予習・復習の習慣が身についていない者の多い専門高校出身者の方が、普通科出身者よりも「勉強が将来に役に立つ」と考える傾向が強いのである。机に座って勉強することが苦手であり、基礎学力は不足しているが、専門高校で経験した職業を通じた教育（実学）に対する親和性は高いのである。このタイプの学生は資格取得を目的とする学科に多く存在する。

また、高校時代に「何のために勉強するのか分からなかった」とする 18％の学生は、勉強する意味が分かっていた学生に比べて、教員に対する期待が低いことも分かった。

職業を通した、または、職業と関連づけた実学性の高い教育内容と方法、加えて、学ぶ楽しさを伝える教員の働きかけが、短大教育への動機づけを高めるキーワードとなる可能性がある。

5. 学習や学生生活の実態と職業選択

次に、短期大学の学生生活と学習の実態、および教育方法と卒後のキャリア・職業への移行支援の関連をみてみる。

現在の短大生活や学習に対する評価群を軸として、職業選択要素に差があるかを分析した。

まず、「授業に関係する勉強」に力を注ぐ学生は、7,859 人中 5,019 人と多数派で、その内 86.8%が、将来の仕事を選ぶ上で「短大や進学先で得た知識・技能の活用」を重視していた（表３）。逆に、力を注いでいない学生（530 人）で、同項目を重視する割合は 54.6％に留まった。平均値でも、高評価群 4.36 に対し、低評価群 3.57 と大きな差が見られる。また、「授業に関係する勉強」の高評価群で「昇進の見通し」を重視する割合が 61.9%であるのに対し、低評価群では 47.8%と低い傾向にあった。つまり、授業に関係する勉強に力を注いでいない者は、昇進の見通しに対する関心が薄いと言える。「余暇のためのゆとり」や「高い収入」に関しては、評価群による大きな違いはなかった。

表３　短大生活（授業に関係する勉強）評価別に見た職業選択時の重視内容

C1－a. 授業に関する勉強【高評価群】						
学科分類		全体	人文・教養	家政	教育	地域総合科学科
N		5019	561	1257	1823	719
Ｅ３－ａ：短大や進学先で得た知識・技能の活用’	High（H）	86.8	79.9	84.5	91.8	84.5
	Low（L）	2.2	3.4	3.7	0.8	1.7
Ｅ３－ｆ：余暇のためのゆとりがあること’	H	79.6	77.4	81.3	78.9	81.8
	L	3.0	4.5	3.0	2.5	3.0
Ｅ３－ｈ：高い収入’	H	75.6	76.1	78.2	72.8	78.6
	L	3.5	2.5	3.2	4.1	3.4
Ｅ３－ｋ：昇進の見通し’	H	61.9	63.7	63.7	61.3	63.5
	L	5.6	7.2	4.7	6.5	4.7
			High:5段階評価で4と5を選択，Low:1･2を選択			
C1－a. 授業に関する勉強【低評価群】						
学科分類		全体	人文・教養	家政	教育	地域総合科学科
N		530	46	142	158	109
Ｅ３－ａ：短大や進学先で得た知識・技能の活用’	H	54.6	44.4	50.7	62.5	52.9
	L	16.4	20.0	17.4	12.5	18.3
Ｅ３－ｆ：余暇のためのゆとりがあること’	H	73.3	68.9	76.8	77.0	71.2
	L	5.5	4.4	4.3	4.6	3.8
Ｅ３－ｈ：高い収入’	H	71.3	60.0	73.9	76.3	68.3
	L	4.9	4.4	5.1	3.9	3.8
Ｅ３－ｋ：昇進の見通し’	H	47.8	26.7	52.9	52.0	43.3
	L	11.9	17.8	9.4	10.5	13.5

また、「実習やインターンシップ等、職場での就業体験」に力を注ぐ学生は、職業選択時に「短大での知識・技能（88.4%）」を重視する傾向が見られる（表４）。このことから、短大での知識・技能の獲得と就業体験が密接に結びつくことを、学生自身が自覚していると考えられる。

表４　短大生活（実習やインターンシップ等、職場での就業体験）評価別に見た職業選択時の重視内容

C1－c. 実習やインターンシップ等，職場での就業体験【高評価群】						
学科分類		合計	人文・教養	家政	教育	地域総合科学科
N		2626	199	537	1458	180
Ｅ３－ａ：短大や進学先で得た知識・技能の活用’	H	88.4	82.8	84.3	90.9	88.8
	L	1.7	2.5	3.4	0.8	1.7
Ｅ３－ｆ：余暇のためのゆとりがあること’	H	79.6	81.3	81.7	78.8	80.4
	L	3.0	3.5	2.6	2.6	4.5
Ｅ３－ｈ：高い収入’	H	76.0	77.3	80.0	73.1	80.3
	L	3.8	2.0	3.4	4.2	4.5
Ｅ３－ｋ：昇進の見通し’	H	64.0	68.7	67.8	61.4	71.3
	L	5.6	6.1	3.2	6.5	4.5
C1－c. 実習やインターンシップ等，職場での就業体験【低評価群】						
学科分類		合計	人文・教養	家政	教育	地域総合科学科
N		3150	459	871	646	689
Ｅ３－ａ：短大や進学先で得た知識・技能の活用’	H	76.1	68.4	75.0	80.7	75.7
	L	6.1	8.8	6.9	4.4	5.3
Ｅ３－ｆ：余暇のためのゆとりがあること’	H	76.7	72.8	79.1	74.8	79.1
	L	4.1	7.5	3.7	3.8	2.7
Ｅ３－ｈ：高い収入’	H	73.3	71.2	74.0	73.9	73.9
	L	4.3	5.3	4.2	3.6	4.0
Ｅ３－ｋ：昇進の見通し’	H	53.4	53.8	55.4	51.3	52.1
	L	8.2	11.3	6.7	8.4	8.6

さらに、アルバイトに力を注ぐ者は、「高い収入（78.6%）」や「昇進の見通し（63.9%）」を重視し、趣味に力を注ぐ者は、「余暇のためのゆとり（81.2%）」を重視することが分かった。

以上のことから、学習や学生生活に対する自己評価が低い学生は、職業選択時に重視する項目の割合が押し並べて低いことから、これらの低評価層の学生の意識を引き上げることが今後の課題となろう。

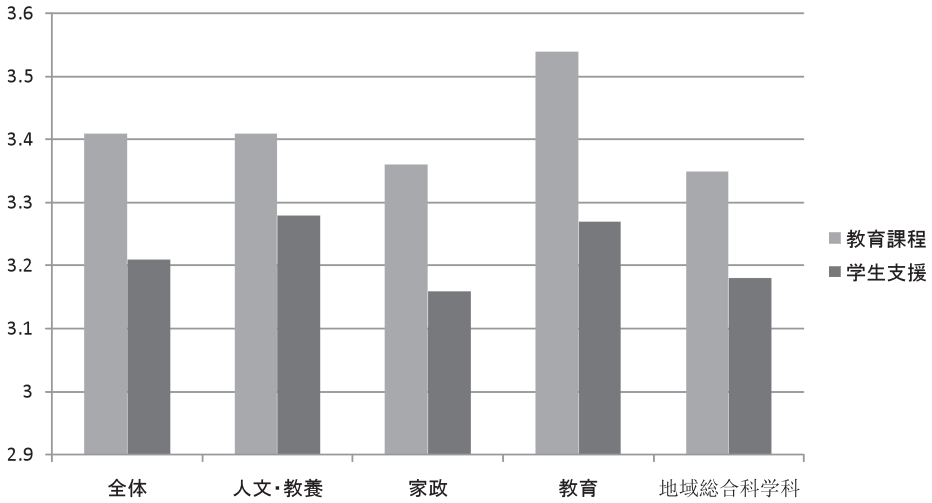
6. 短大の学習環境に対する評価

6-1　学習環境全体に対する評価

ここでは、短大の「学習環境（教育課程・学生支援）」は「学びの中間的な成果」を規定する大きな要因である、という視点に立ち、学習環境の中でキャリア教育・職業教育を意図していると考えられる要素（設問項目）に対する満足度（５段階）を確認し、それらと授業への力の注ぎ方との関係をみていくことにする。（学習環境についての設問項目は、表５・表６を参照のこと）

教育課程について、ａ～ｈの８項目すべての５段階評価の平均値でみると、教育（3.54）、人文・教養（3.41）、家政（3.36）、地域総合科学科（3.35）と続く。学生支援についてｊ～ｒの９項目すべての５段階評価の平均値でみると、人文・教養（3.28）、教育（3.27）、地域総合科学科（3.18）、家政（3.16）と続く。そして、全体的に教育課程に対する評価よりも学生支援に対する評価の方が低いという傾向がみられる。（図４）

図４　学習環境全体に対する評価



6-2　教育課程に対する評価

キャリア教育・職業教育を意図していると考えられる教育課程の項目を５段階評価の平均値でみると、「ｃ：専門的知識や技術を身につける授業 (3.79)」「ｄ：実践（職業）で役立つ実学性重視の授業 (3.66)」「ｂ：豊かな教養を身につける授業 (3.46)」「ａ：選択できる授業の多様性 (3.38)」「ｅ：学外体験（実習やインターンシップ）の機会 (3.28)」であった（表５）。これらは、それ以外の「ｈ：参加意識が持てる授業 (3.27)」「ｆ：わかりやすい授業 (3.26)」「ｇ：授業方法に工夫がある授業 (3.25)」「ｉ：私語のない授業 (2.88)」の満足度よりも高い傾向にある。

これを分野別にみると、キャリア教育・職業教育を意図していると考えられる教育課程への満足度は、分野別でばらつきはあるが、４分野とも「専門的な知識や技術を身につける授業」への満足度が高い。また、「教育」は全体的に満足度が高く、「地域総合科学科」は「選択できる授業の多様性」の満足度が高くなっている。 そして、どの分野でも「私語のない授業」への満足度が特に低い。

表５　教育課程に対する評価

学科分類	全体	人文･教養	家政	教育	地域総合科学科
N	7470	818	1858	2659	1151
c:専門的知識や技術を身につける授業	3.79	3.59	3.79	3.92	3.65
d:実践（職業）で役立つ実学性重視の授業	3.66	3.41	3.61	3.88	3.44
b:豊かな教養を身につける授業	3.46	3.55	3.39	3.54	3.50
a:選択できる授業の多様性	3.38	3.52	3.35	3.28	3.75
e:学外体験（実習やインターンシップ）の機会	3.28	3.20	3.14	3.66	2.98
h:参加意識が持てる授業	3.27	3.34	3.22	3.34	3.18
f:わかりやすい授業	3.26	3.35	3.18	3.36	3.16
g:授業方法に工夫がある授業	3.25	3.35	3.17	3.35	3.16
i:私語のない授業	2.88	2.98	2.94	2.85	2.88

6-3　学生支援に対する評価

同様に学生支援を評価すると考えられる項目では、「ｓ：図書館や情報設備 (3.56)」「ｐ：就職・進路支援の体制 (3.47)」「ｊ：科目履修に関する助言や指導 (3.40)」「ｌ：学習スキルを向上するための手助け (3.30)」「ｍ：教員の専門分野に触れる機会 (3.30)」「ｋ：就職や編入学など進路選択の励まし (3.20)」「ｑ：進路や悩みなどを気軽に相談できる体制 (3.19)」「ｒ：部活・サークル・イベントなど学生同士の交流の機会 (3.03)」「ｎ：精神的なケアや励まし (3.00)」「o: 授業以外で教員と交流する機会 (3.00)」の順で評価が高かった。このうち、キャリア教育・職業教育を意図していると考えられる学生支援要素は「p、ｊ、ｍ、ｋ、ｑ」であり、それらへの満足度はそれ以外の満足度よりも若干高い傾向にあると言える。

分野別にみると、「人文･教養」は「図書館や情報設備」をはじめ、全体的に満足度が高い。そして、４分野とも「就職・進路支援の体制」（ハード面）への満足度は高いが、「就職や編入学など進路選択への励まし」（ソフト面）への満足度はそれよりも低い。また、4 分野とも「精神的なケアや励まし」「授業以外で教員と交流する機会」への満足度も低い。

表６　学生支援に対する評価

学科分類	全体	人文･教養	家政	教育	地域総合科学科
N	7470	818	1858	2659	1151
s:図書館や情報設備	3.56	3.82	3.55	3.60	3.50
p:就職･進路支援の体制	3.47	3.63	3.41	3.50	3.50
j:科目履修に関する助言や指導	3.40	3.44	3.39	3.41	3.44
m:教員の専門分野に触れる機会	3.31	3.29	3.28	3.38	3.22
l:学習スキルを向上するための手助け	3.27	3.38	3.23	3.30	3.24
k:就職や編入学など進路選択の励まし	3.21	3.34	3.16	3.23	3.23
q:進路や悩みなどを気軽に相談できる体制	3.19	3.29	3.11	3.26	3.17
r:部活･ｻｰｸﾙ･ｲﾍﾞﾝﾄなど学生同士の交流の機会	3.02	3.08	2.94	3.16	2.98
n:精神的なケアや励まし	3.01	3.03	2.94	3.10	2.97
o:授業以外で教員と交流する機会	3.01	3.05	2.95	3.09	2.91

6-4 「授業に関係する勉強」への力の注ぎ方とキャリア教育・職業教育との関連

5. で述べた通り、短大入学後「授業に関係する勉強」に力を注いだ学生（４と５）は、合わせて約 65％である（7,859 人中 5,019 人）。そのような授業への熱意が高い学生ほどキャリア教育・職業

教育を意図していると考えられる要素への満足度が高い傾向にある（表７）。

特に「専門的な知識や技術を身につける授業」「実践（職業）で役立つ実学性重視の授業」への満足度が高い傾向がみられる。このことは、授業に集中させることによって、キャリア教育・職業教育の効果が上がる可能性があると言えるだろう。

表７　短大生活（授業に関係する勉強）評価別に見たキャリア教育・職業教育への評価

	全体	１全く力を注がなかった	2	3	4	５大いに力を注いだ
N	7458	130	373	2140	3345	1470
%	100	1.7	5.0	28.7	44.9	19.7
ａ：選択できる授業の多様性	3.38	2.75	2.94	3.15	3.44	3.73
ｂ：豊かな教養を身につける授業	3.46	2.65	2.98	3.22	3.53	3.84
ｃ：専門的知識や技術を身につける授業	3.79	2.92	3.25	3.49	3.89	4.22
ｄ：実践（職業）で役立つ実学性重視の授業	3.66	2.82	3.12	3.40	3.75	4.04
ｅ：学外体験（実習やインターンシップ）の機会	3.28	2.68	2.89	3.13	3.33	3.56

以上のことから、短期大学の教育における職業への効用（「専門的な知識や技術を身につける授業」「実践（職業）で役立つ実学生重視の授業」など）は、入学後半年目で学生たちに自覚され始めていると言えよう。したがって、キャリア教育・職業教育を意図していると考えられる教育課程や学生支援が、卒業までにどのように機能していくか、また卒業後どのように機能していくかについてのさらに詳しい調査が必要だと考えられる。

7. まとめに代えて

筆者らは、学生たちの入学から卒業時までの段階的な成長の観察と、その後のフォローアップによる卒業生の観察までを視野に入れたパネル調査を企画し、短期大学の教育プログラムの点検･評価、教育改善へのサイクルについてのモデルを確立しようと試みている。本研究はその第一歩、すなわちこれからの縦断的研究の礎を記したものであり、以下のようなことが示唆された。

今日の少子化、大学全入時代の波の中で、短期大学入学者層の多様化は、短期大学間のみならず一つの短期大学内においても生じている。また、とりわけ短期大学では、高校における進路・キャリアを意識させる教育活動が欠落していることと関連すると想定されるが、「高校学習の無意味感覚」をもつ学生が多数入学し、特定の短大・学科に集中する傾向をも生み出している。

したがって、このような入学者層の質的な変化への対応として、「平均の変化への対応」と「分散の変化への対応」の両方を考えていかなければならなくなってしまった。すなわち、ただ「入学者の質が上がった、下がった」ということに対する対応だけではなく、「入学者の上位レベルと下位レベルの開きが大きくなった」ということに対する対応も必要になったということである。

「地域総合科学科」は、より進路・職業を意識した学科として、この多様な学生に即応した指導モデル確立への一つのアプローチとして創設されたが、本研究の時点では、いまだ明確な効果を示すところまでは至っていない。また「人文・教養」のような学習スキル中心の領域では、現在の状況でキャリア教育・職業教育の一層の推進は困難であろうと思われる。そこで、職業に明確に焦点を

あてることで「学習スキル」と「職業・キャリアへのオリエンテーション」との両方に相乗的にアプローチする教育領域が必要となってくるだろう。

参考文献

安部恵美子他 2008『短期大学卒業者のキャリア形成に関するファースト・ステージ論的研究』平成 16 ～ 18 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1）　課題番号 16330170）研究成果報告書
安部恵美子、小嶋栄子 2010「『在学生調査』からみた長崎短期大学の教育　～全国調査との比較から見えた本学教育の傾向と対策～」『研究紀要』第 22 号、長崎短期大学

【本稿は、大学教育学会第 32 回大会 (2010.6.5) 口頭発表「短期大学の学生調査　―キャリア教育・職業教育の探究―（その１）（その２）」（安部恵美子、吉武利和（香蘭女子短期大学）、吉本圭一（九州大学）、河野睦美、小嶋栄子、末松泰子（東海大学福岡短期大学）で発表した内容の一部に加筆修正したものである。】

注１：本報告で使用したデータは、平成 21 年度科学研究費補助金「短期大学教育とステークホルダーに関する総合的研究」（基盤研究（B）課題番号 21330195、研究代表者：安部恵美子）の助成を受けて行った調査のものである。データの数値は 2010.3.31 現在の速報値である。
注２：ここの比較で使用した卒業生のデータは、安部恵美子他 2008 の調査結果から抽出している。